

とくしま 授業技術の基礎・基本

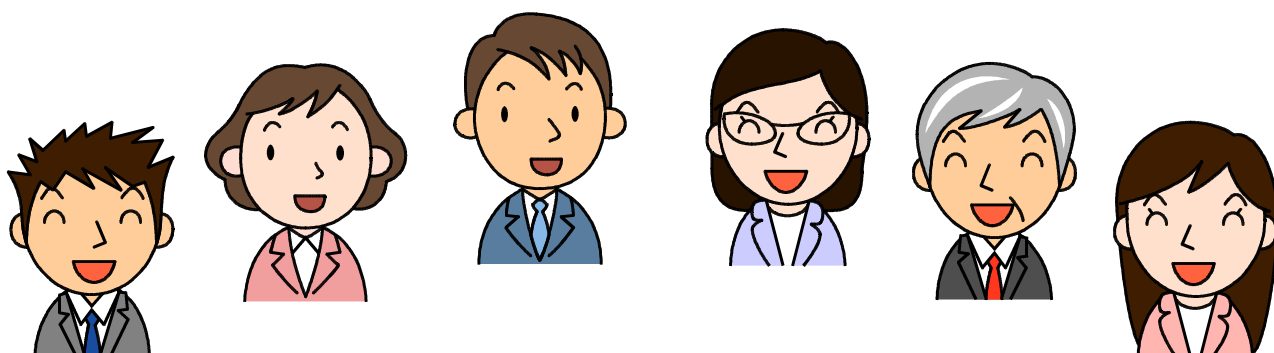
1 授業力向上に向けて
発問、板書、ノート指導、
I C T (タブレット端末等)の活用 編

2 主体的に学習する児童生徒を育てるために
学習規律、学習形態の工夫、進度・学力差への対応、
学習の見通し・振り返り 編

3 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた
授業づくり
学級・学習集団づくり、教材研究、単元(題材)設定、
学習評価 編



徳島県立総合教育センター



はじめに

「とくしま 授業技術の基礎・基本」は、授業力向上研修（採用となり2年目に行う研修、平成30年度よりフレッシュ研修Ⅱに名称変更）を受講した先生方が1年間を振り返り記入した「授業点検シート」「授業力向上研修実施報告書」の結果を分析した結果を基に、教職経験の少ない先生方の授業技術を高めるための資料として、平成26年度の「発問、板書、ノート指導、ICTの活用」編、平成27年度の「学習規律、学習形態の工夫、進度・学力差への対応、学習の見通し・振り返り」編、平成28年度の「学級・学習集団づくり、教材研究、単元（題材）設定、学習評価」編の三編構成として作成しました。

作成以来、教職経験の少ない先生方に限らず、県内各校種において校内研修や授業実践に活用していただいております。学習指導要領等を踏まえ、適宜、改定しています。これまでと同様、多くの先生方に活用していただければ幸いです。

令和7年3月

目 次

ページ

1 - I 発問について 1

ポイント 1 …発問とは？

ポイント 2 …発問の仕方は重要な指導技術

ポイント 3 …発言の取り上げ方

1 - II 板書について 3

ポイント 1 …板書の量

ポイント 2 …文字の大きさ

ポイント 3 …板書中の指導

1 - III ノート指導について 5

ポイント 1 …ノートづくり

ポイント 2 …振り返り

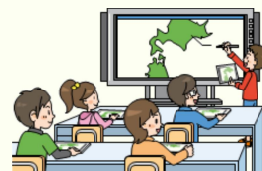
ポイント 3 …点検や評価

1 - IV ICTの活用について 7

ポイント 1 …ICT（タブレット端末等）活用の基本的な考え方

ポイント 2 …学校におけるICT（タブレット端末等）の活用事例

ポイント 3 …ICT（タブレット端末等）活用の留意点



2 - I 学習規律について 9

ポイント 1 …教師が模範を示す

ポイント 2 …共通理解、共通実践

ポイント 3 …校種間の共有

2 - II 学習形態の工夫について 11

ポイント 1 …学習目標にあった学習形態

ポイント 2 …事前・活動中・事後における教師の支援

2 - III 進度・学力差への対応について 13

ポイント 1 …ころばぬ先の杖

ポイント 2 …つまずき予想

ポイント 3 …個別指導

2 - IV 学習の見通し・振り返りについて 15

ポイント 1 …【見通し】何を・なぜ・どのように

ポイント 2 …【振り返り】自己評価・「見通し」と対に



3 - I 学級・学習集団づくりについて 17

ポイント 1 …ルールの定着

ポイント 2 …リレーションづくり

ポイント 3 …個と集団の視点

3 - II 教材研究について 19

ポイント 1 …授業づくりは、教材研究から

ポイント 2 …教材研究のすすめ方

ポイント 3 …主体的に学ぶ教材

3 - III 単元(題材)設定について 21

ポイント 1 …学習過程の構造化

ポイント 2 …児童生徒が言葉を駆使して表現する場面の設定

ポイント 3 …ワークシート等の工夫

3 - IV 学習評価について 23

ポイント 1 …学習評価とは

ポイント 2 …具体的な児童生徒の姿

ポイント 3 …学習評価の仕方

1-1 発問について

ポイント1…発問とは？ ポイント2…発問の仕方 ポイント3…発言の取り上げ方

この時間の授業で児童生徒にどんな力を付けるのかという目標を明確にし、その目標を達成させるための発問計画を立てることが大切です！



ポイント1…発問とは？

児童生徒の様々な資質・能力を引き出し、それを伸ばし発展させるために、教師が発する問いであり、授業の流れを作る柱となります。

① 経験したこと、知っていることなどを問う発問

例「このことについて、知っていることはありませんか？」

② 問題場面の原因を考えさせたり、結果を推測させたりする発問

例「このような結果になった原因は何でしょう？」

「そう考える根拠はどこにあると思いますか？」

③ 学習内容を比較させたり、選択させたりする発問

例「問題1と問題2とでは、解き方にどんな違いがあるのでしょうか？」

ポイント2…発問の仕方は重要な指導技術

① 明確な問い方

- ・はっきりと1度で問う。・・・わかりやすい。
問い方を変えていくとどう答えればよいかわからなくなる。

② 多様な考えを引き出す問い方

- ・「…すると、どうなりますか？」・・・いろいろな考え方を答える。
「…すれば…になりますか？」だと「はい」「いいえ」など簡単な答えしか返ってこない。

こんな発問をしましょう。

- ア 明確な発問
 - イ 学習目標を意識し、個人差を考慮した発問
 - ウ 多様な考え方を引き出す発問
 - エ 様々な心の動きを促す発問
 - ・学習を方向付ける ・学習内容を広げる
 - ・学習内容を深める ・学習内容をまとめる
- 発問に対する反応を予想し、できるだけ多く
教材研究で考えておきましょう。



ポイント3・・・発言の取り上げ方

① 発言を的確に評価する

- ・一人一人の考えのよさやつまずきを見抜き、指導の手だてを工夫する。



② 誤答を大事に扱い、それをより深め、広めていくことが望ましい

- ・発言者の考えを他の児童生徒の思考のヒントにする。(発言の教材化)
「みなさん、今の〇〇さんの考え方を、自分の言葉で説明してみましょう。」
このことで、〇〇さんの意見を全体の学びとすることができる。また、他の児童生徒の話を説明することで、聞く習慣が身に付くだけでなく、聞いたことに自分の意見を付け加え発言すれば、考えながら聞く学習へと発展させることもできる。
- ・誤答から学習を深め問題解決できた喜びを、みんなで分かち合う雰囲気を作りたい。

◎発問や指示は、児童生徒がきちんと前を向いているかを確認してからしましょう。作業やグループ学習の時には、その前にするか、途中であれば必ず手をおかせ、作業等を止めてから出しましょう。

◎予想外の考え方が出てきたときには、なぜそうなったのか児童生徒の発言を理解しましょう。また、正誤の判断ができないときは、次の時間に必ず対応をしていきましょう。

◎児童生徒と共に学習を進めていくようにしていきましょう。



1-11 板書について

ポイント1…板書の量
ポイント2…文字の大きさ
ポイント3…板書中の指導

- 板書には、次のような優れた役目があります。
- ① 学習内容を構造化してまとめます。
 - ② 学習過程をわかりやすく整理して思考活動をさかんになります。
 - ③ 思考の手がかりとなります。



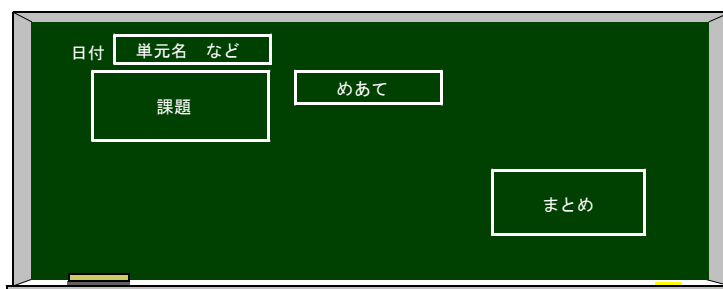
※児童生徒が見て、本時の
目標がわかる板書に。

ポイント1…板書の量

① 1 単位時間に黒板 1 枚程度

- ・ 書いたら消さないようにする。1 枚に収まらないときは、補助黒板等を使用する。
- ・ 黒板の下の方や両脇には書かないようにする。

【横書きの例】



② 学習の流れやポイントがわかる

- ・ 学習内容の大切な場所がわかるように板書計画を立てる。

ポイント2…文字の大きさ

① 正しい字形・正しい筆順

- ・ 児童生徒は、先生の字を見て学ぶので、文字は丁寧に書くようにする。板書には、縦書きや横書きがあるが、斜めに曲がることなくまっすぐ書くようにする。児童生徒の座席からも黒板を見るようにする。

② 後ろの席からも十分に見える大きさ

- ・学年に応じた文字の大きさを考える。一般的に小学校低学年では、15～20cm角、中学校・高等学校では5～10cm角に書ける程度の大きさを目安にする。
- ・掲示物の文字の大きさも考慮する。
- ・大型テレビや、プレゼンテーションのための視聴覚機器を使用する際には、機器の配置や教室の明るさに気を付け、黒板が見えにくくならないようにする。



ポイント3…板書中の指導

① 書きながら内容を確認

- ・重要なポイントは強調する。

② ノートとの関連

- ・児童生徒の書く速さを考えながら板書をする。

③ 児童生徒も黒板を使って説明

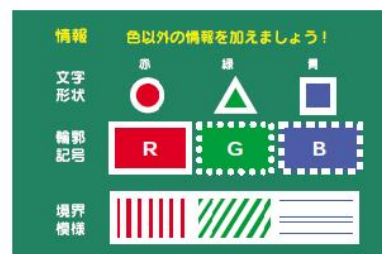
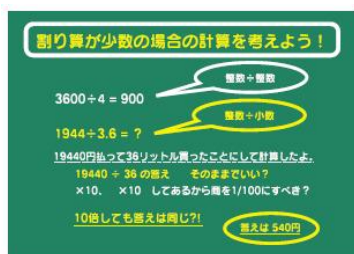
- ・黒板で説明や発表ができる場面をつくる。

④ 授業のまとめに、板書の内容を確認

- ・授業の内容を確認しながら振り返りをする。

⑤ 色チョークを有効に

- ・色チョークを用い、図式化するなどの変化をつける。使う色への配慮も必要である。



赤、緑、青、茶色等の暗い色のチョークは避け、白と黄を主体に使用します。

あえて白と黄以外のチョークを使用する場合は、形状、輪郭線、模様、記号・文字など、色以外の情報を加えて分かりやすくします。

(文部科学省「色覚に関する指導の資料」より)

- ◎児童生徒に伝えたいことは何かをはっきりしておきましょう。
- ◎「位置・内容・量」などに気を付けて板書計画を立てましょう。
- ◎どの教科等の板書も、児童生徒にわかりやすいよう工夫しましょう。

板書計画で授業は変わります!

1-III ノート指導について

ポイント1…ノートづくり
ポイント2…振り返り
ポイント3…点検や評価

書くことによって、児童生徒は思考過程を整理し、考える内容を明確にすることができます。

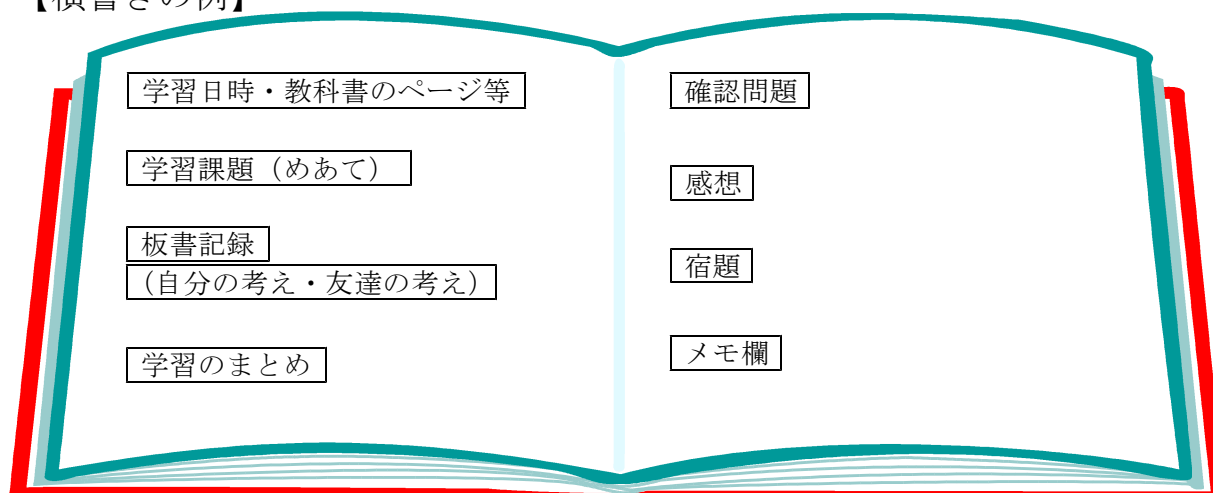
※何を、何のために、どのように書くのか。
※ノート指導を通して、いかに児童生徒の学ぶ意欲を高めていくのか。



ポイント1…ノートづくり

目的に応じた書き方の指導（考えをつくったり、深めたりするノート指導）

【横書きの例】



- ① 「思考対象が手元にある」よさを生かすために、板書と連動
 - ・板書を写すだけでなく、自分の言葉で書かせる。
 - ・言葉だけでなく、絵やイメージ図で自分の考えを表現させる。
 - ・定型文を示し、根拠を必ず書かせる。
- ② ガイダンスを実施し、記入方法や書き方などを確認
 - ・記入方法や書き方などの基本的なことを全員ができるようにする。
- ③ 児童生徒の発達段階を考慮したノート（マス目・罫線の幅等）を準備
 - ・付箋の利用、色使いの工夫、枠、アンダーラインなどで、構造化できるよう指導する。

ポイント2…振り返り

① 学びを振り返ることができるようなノート指導

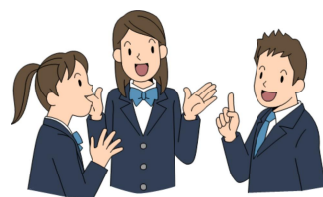
- ・「前の時間はどんなことを学習したのかな？」と教師が聞いたとき、児童生徒が自分のノートで確認し、振り返りができるような書き方を工夫する。

② 「自分だけの宝物」となるようなノート指導

- ・後から見直したとき、どこに何が書いてあるかがわかるノートにする。
- ・毎時間または単元ごとに、わかったことや疑問に思ったことを書き、学習を振り返る。

③ 意欲化につながるようなノート指導

- ・書くスピードや丁寧さなど、個人差にも対応する。



ポイント3…点検や評価

○ ノート点検や評価の工夫

- ・ノートの点検、教師による評価などを定期的に行い、助言や励ましの言葉、感想などを添える。
- ・ノートの上手なとり方の例を、コピーや学級便りなどの提示によって紹介、効果的なノートづくりをすすめる。

◎各教科等の特性に応じて、色分け・レイアウト・下線・吹き出し・矢印などを効果的に取り入れましょう。

◎「自分の考え」を書く時間を確保しましょう。

◎定期的にノートの評価を行いましょう。

◎理由や根拠、方法や考え方などをノートに書かせましょう。

◎条件（字数やテーマ）などに併せてノートに書かせましょう。

◎授業で児童生徒のノートを活用しましょう。

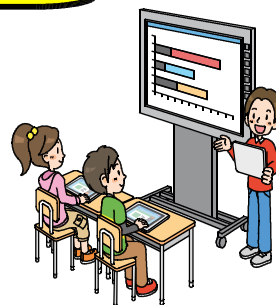
1-Ⅳ ICT(タブレット端末等)の活用について

- ポイント1… ICT(タブレット端末等)活用の基本的な考え方
- ポイント2… 学校におけるICT(タブレット端末等)の活用事例
- ポイント3… ICT(タブレット端末等)活用の留意点

※ICT=Information and Communication Technology

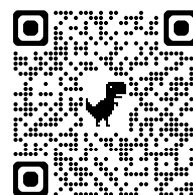
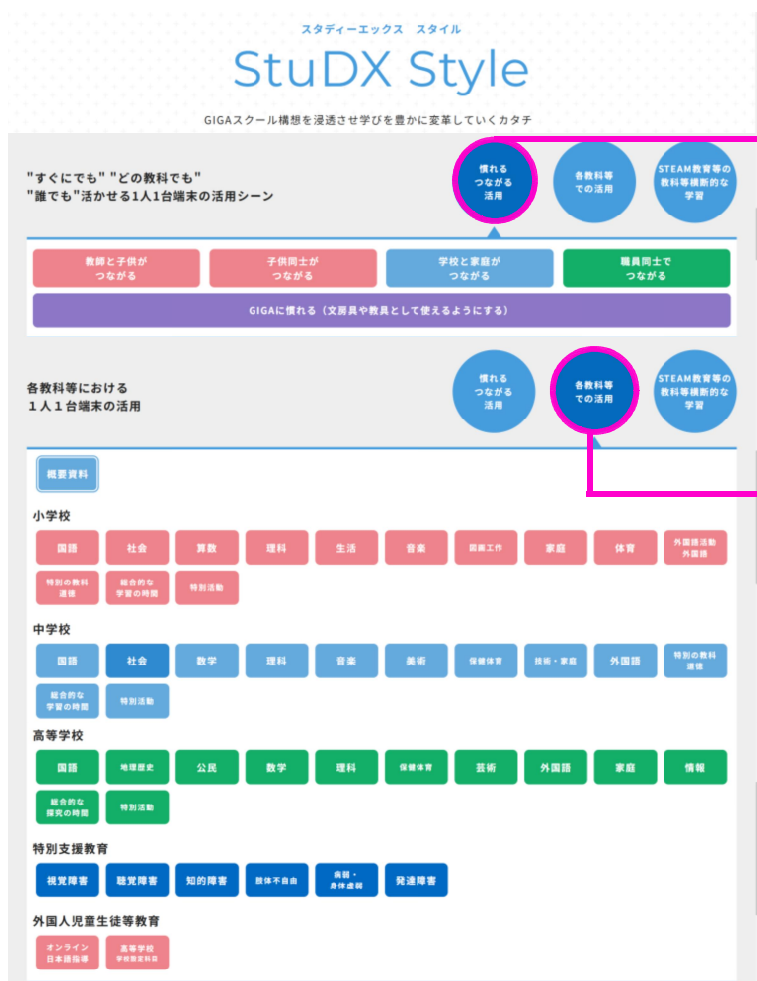
ポイント1…ICT(タブレット端末等)活用の基本的な考え方

学習指導要領に基づき、資質・能力の三つの柱をバランスよく育成するため、子供や学校等の実態に応じ、各教科等の特質や学習過程を踏まえて、教材・教具や学習ツールの一つとしてICTを積極的に活用し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげるのが重要。



ポイント2…学校におけるICT(タブレット端末等)の活用事例

「StuDX Style」では、端末の活用方法に関する事例等が多く紹介されています。(https://www.mext.go.jp/studxstyle/)



「慣れるつながる活用」では、1人1台端末の授業等での活用のヒントや事例が紹介されています。

「各教科等での活用」では、各教科等の指導における1人1台端末の活用について、各教科等の特質を踏まえた事例が紹介されています。

ポイント3…ICT（タブレット端末等）活用の留意点

① タイミング

ICT（タブレット端末等）活用の効果をより高めるためには、授業のどの場面、どのタイミングで使用するかが大切である。また、情報の提示は、板書の代わりになるものではなく、板書計画、ノート指導も含めた授業計画が必要である。

② 健康面

教室の明るさは、天候、時刻、季節などによって影響を受けた場合、適切な明るさの確保・維持が難しいことがあるので、児童生徒の目の疲労等に留意する必要がある。

ア 教室の明るさ

カーテン等をうまく利用したり、照明を点けたりして利用することが望ましい。

イ 電子黒板

画面の映り込みの防止や文字の見やすさへの配慮を行う必要がある。

ウ タブレット端末等

児童生徒が同じ姿勢を長時間続けないようにしたり、長時間端末の画面を注視したりしないようにする。

◎インターネットや画像を使用するときには、著作権等に十分配慮をしておきましょう。

◎コンピュータやプロジェクタの機器の故障、不具合等にも十分に配慮しておかなければ、授業が中断してしまいます。もしものときに、対応できるような準備を必ずしておきましょう。



2-1

学習規律について

ポイント1…教師が模範を示す
ポイント2…共通理解、共通実践
ポイント3…校種間の共有

全国学力・学習状況調査においても、学習規律の確立が学力向上に有効であることが明らかとなっています。

しかし、学習規律は、自然に確立されていくものではありません。教師が意図的・計画的な指導をすることによって、児童生徒は身に付けていきます。

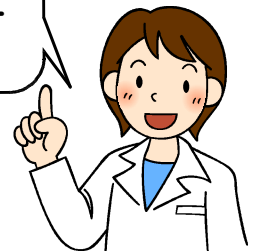
児童生徒の守るべき学習規律は、教師の守るべき指導規律です。



ポイント1…教師が模範を示す

- ① 学級開きを大切にする。
- ② 教師が、児童生徒との良好な人間関係をつくる。
- ③ 児童生徒同士の良好な関係を育み、教室を温かい空気で満たす。
- ④ 教室環境を整える。

教師自らが時間を守る、身の回りの整理整頓をするなどの模範を示すことが大切です。



ポイント2…共通理解、共通実践

学校全体で共通理解を図り、全教職員で取り組むとともに、学習規律の大切さを児童生徒に理解させることが大切です。

- ① 学習の準備、挨拶、姿勢、発表の仕方、話の聞き方、話し合いの進め方などの学習規律について、児童生徒の状況を全職員で確認する。
- ② 現在、各学級や各教科でどのように指導しているかを共有し、最も効果的な指導方法を考える。
- ③ 学校として必要な学習規律を全教職員で決める。
- ④ 児童生徒への示し方や徹底を図るための方法を決める。
- ⑤ 徹底を図るために、学校全体で根気強く、繰り返し指導を行う。

ポイント3…校種間の共有

中学校区で共通の「学習規律」を共有し、校種間で一貫した指導を行ったり、家庭にも協力をお願いしたりするなど、徹底した意識付けを図ることが大切です。

がくしゅう やくそく 学習の約束

〇〇小学校

1. 休み時間から、学習用具を準備しておく。
2. チャイムの合図を守る。
3. 正しい姿勢で学習する。
4. 話をしている人の顔を見て、最後まで話を聞く。
5. 自分の考えを進んで発表する。
6. ノートは、ていねいな字できちんと書く。

学びのルール

〇〇中学校

1. 授業に必要なものを忘れない。
2. 授業準備をして、チャイム着席をする。
3. 最後まで、集中して授業を受ける。
4. 先生や友達の話をよく聞く。
5. 自分の意見をしっかりと発表する。
6. 予習・復習をする。
7. 机やロッカーは、いつも整理整頓をする。



学習規律と学級経営

(あせび小学校 A教諭)

今年度、教職二年目を迎えましたが、学級全体が集中できず、授業がうまくいきません。発言する子供も限られ、騒がしい状況で、ついつい大きな声を出して静かにさせながら授業をしていますが、長続きしないし、そのせいで学級の雰囲気はあまりよくありません。隣の学級は、授業中、静かに集中しているし、それが逆にプレッシャーになってしまい、ますますきちんとさせなければと思い、空回りしていました。

そんな時、そのことを他の先生に相談すると、「子供たちを信頼して自分の気持ちを子供たちに伝えて、話し合ってみたら？」と言われました。そして、子供たちにどんな学級をつくりたいのかを話し、「安心ルール」を子供たちと一緒に作りました。「居心地のよい学級にしたい。」「勉強がわかるようになりたい。」「楽しい授業にしたい。」そんな子供たちの願いが集まって、学習規律ができることを私は学びました。

確かな学力の向上を図るためには、学校において、支え合い高め合う集団づくりを行うとともに、児童生徒が落ち着いた雰囲気の中で学習に集中することができる環境づくりに取り組むことが必要です。そのためには、学びの基盤となる学習規律を児童生徒に身に付けさせることが大切です。

2ーII

学習形態の工夫 について

**ポイント1… 学習目標にあった
学習形態**

**ポイント2… 事前・活動中・事後
における教師の支援**

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の一つとして、学習形態の工夫は大切です。教室でのグループディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等は、自分の思いや考えを表し、互いに考えを共有する場となります。

授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要です。



(『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)より作成)

ポイント1…学習目標にあった学習形態

児童生徒にどんな力を付けたいのか、1時間の目標を明確にし、その目標を達成させるために効果的な学習形態をとることが大切です！



例えば、クラスで一つの案を生徒会に提案する場合、話し合いの目標は、互いの意見を一つにまとめることとなります。また、読書の感想の交流であれば、互いの感想を聴き合い、共通点や相違点などを学ぶことが目標となります。

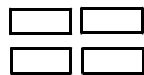
学習目標達成のために、クラス全体、グループ、ペアなど、どの学習形態が効果的なのかを考えて選択しましょう。

ペア型



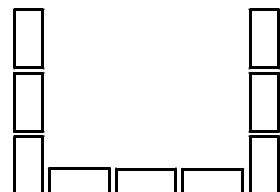
- ・グループでの活動の前段階として有効である。
- ・児童生徒全員が、気軽に交流ができ、自分の考えの確認がしやすい。

グループ型



- ・教材やノートを互いに見合いながら話し合い、考えを深めることができる。

コの字型



- ・互いの顔を見ながら学習でき、教師は児童生徒の側で学習状況を把握できる。

※もちろん、一斉学習も、教師から説明や指示を行う際には、必要です。

ポイント2…事前・活動中・事後における教師の支援

ペア・グループ学習を行う前には、活動内容やねらいを明確に指示し、学習活動時には、各集団を観察し適宜アドバイスをしましょう。学習活動後には、全体で各集団の学びを共有することが大切です。



ペア・グループ学習の一例

発表に自信がもてない児童生徒がいる場合、互いに認め合う場を作ることが大切です。まず、自分の考えをノートにまとめてから伝え合い、次に、互いの考えを比較してノートにまとめ、話し合う前後で自分の考えがどう変化したかを書きます。書く力が身に付くだけでなく、自信をもって発表に臨むことができるようになります。また、意見を話し合い、聴き合う中で、互いを認め合う人間関係が築けるとともに、自己有用感も育まれていきます。

〈実践例〉

① ホワイトボードを使って、グループ学習

最初に様々な意見を自由に出し合い、それらをボードを使って提案できる形にまとめる。まとめたボードを見せながら発表する。

② ミニホワイトボードで、個別学習・グループ学習

説明する場面ではフリップとして使ったり、考えを交流する場面では自分の考えをボードに書いて掲げたりして活用する。

③ ジグソー学習法でグループ学習

グループで共有している課題について、自分なりの答えをまず各自が書く。次に、課題を解くための、視点の異なる三つ程度の資料を一人一つずつ分担する。同じ資料を担当する者同士で新しいグループを作り、理解を深める。その後、再びもとのグループに戻って、自分が担当した資料について説明する。全員の説明が終わったら、班で答えをまとめる。

(学習班で課題を共有する) → (追究班に分かれる) → (学習班に戻って交流する)

班員 A B C D

A A A A

A B C D

④ ホットシーティングで、グループ学習

例えば、国語で、児童生徒の一人が作品中の登場人物になる。その他の児童生徒は、作品にかかわるいろいろな質問をする。登場人物役の児童生徒は、その役になりきって答える。

主体的に学習する児童生徒を育てるためには、学習形態を工夫して、話し合ったり、交流したりする言語活動を取り入れることが有効です。

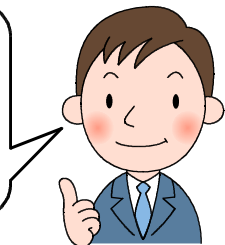
【聴き方「あいうえお」】
あ 相手の方を見て
い いつも一生懸命
う なずきながら
う 受け止めて
え 笑顔で
お 応援する気持ちで

2ーIII

進度・学力差への 対応について

ポイント1…ころばぬ先の杖 ポイント2…つまずき予想 ポイント3…個別指導

進度・学力差と聞くと、個別指導を連想するかもしれませんが、もちろんそれは大切なことです。しかし、まずは、個別指導を行うまでに、課題提示の工夫や教材研究など、しておかなければならない準備があります。



児童生徒に本時の課題をわかりやすく提示することがスタートです。課題の把握が不十分では、自力で解決することも容易ではありません。

ポイント1…ころばぬ先の杖

① 学級の実態に応じた課題提示

評価規準を考える際に、学級の実態を知ることが大切です。同様に、課題の提示も目の前の児童生徒の実態に即して行う必要があります。校種・学年・教科によって工夫が必要です。

② わかりやすい課題提示

I C T機器を活用して興味・関心を呼び起こしたり、課題とねらいを板書してノートに視写（書き写し）させたりするなど、導入の工夫をすることが大切です。



ポイント2…つまずき予想

① 個別指導を適切に行うためにも重要

児童生徒がどの部分につまずいているかを適切に把握するためにも、教材研究は重要です。本時に予想されるつまずき箇所とその解決方法を予め把握しておく、個別指導での児童生徒の考え方の見取りが早くなります。

② 考えさせたいことと教えなければならないこと

はじめから教え込んでしまうと考える力が身に付きません。しかし、自力で解決できないとなると、しっかり支援をして教えなければなりません。その見極めも教材研究にかかっています。

ポイント3…個別指導

① 机間指導で最初に行うこと

机間指導では、まず、全員が課題を把握できているかどうかを確認します。把握が不十分な児童生徒に、一人に1分かけて説明をするとなると、五人で5分を必要とします。多くの児童生徒が課題を把握できていないなら、全体の活動を止めて課題の再提示をします。

② ヒントカードの使い方

自力解決が困難な児童生徒に、解き方のヒントを記したヒントカードを配る方法があります。しかし、毎時間、カードの準備をするのは大変です。そこで、教科書をヒントカードとして使う方法があります。教科書の該当ページを開けて、いっしょに確認すると理解が進みます。

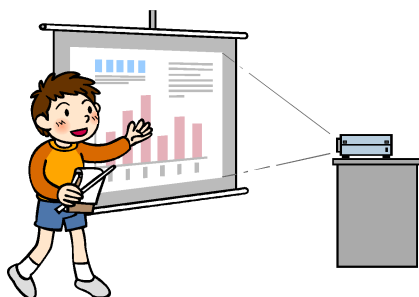


③ つまづいている児童生徒も進んでいる児童生徒も共に

課題が早く終わった児童生徒のために、次の課題を用意しましょう。ともすれば、個人差への対応は、つまづいている児童生徒に向けられがちですが、進んでいる児童生徒への対応も大切です。進んでいる児童生徒に、みんなの前で自分の考え方を説明させるのもよいでしょう。

④ 量的に与えるから質的に与えるへ

学習プリントを用いる際には、量と質の両方の面から考えます。プリントが1枚できれば次の1枚へと進ませる方法は、課題を量的に与えたことになります。一方、3分以内でできるプリントでも、あえて3分間を確保し、誤りがないように何度も見直しをさせるといった質的に課題を与える方法もあります。方法を使い分けましょう。



「教えるべきは教え、躱けるべきは躱け、正すべきは正す」ことが大事です。本時に身に付けなければならないことが不十分な児童生徒には、時間をおかずに教える必要があります。

2-Ⅳ

学習の見通し・振り返りについて

ポイント1…【見通し】

何を・なぜ・どのように

ポイント2…【振り返り】

自己評価・「見通し」と対に



全国学力・学習状況調査クロス集計より、学力向上に向けた授業の改善・充実をはかるためには、「見通し・振り返り」活動が大変有効であることが明らかとなっています。

確かな学力向上のためには、授業において、児童生徒自身が「何を学ぶのか」を理解し、結果として授業で「何を学んだのか」を実感できる学習活動が大切です！

ポイント1…【見通し】

何を・なぜ・どのように学ぶのか

この時間の授業で児童生徒が「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」を理解していることが大切です。そのためには、学習者の立場で「見通し」を捉えることが大切です！



① 目標分析

学習指導要領や各校で身に付けさせたい資質・能力等から明確な目標設定をします。「教えたこと」(指導者)から「学びたいこと」(学習者)へ捉え直す工夫を大切にしましょう。

② 何を・なぜ学ぶのか

単元の「見通し」とこの授業の「見通し」から課題意識をもたせましょう。児童生徒自身から疑問や課題が生まれる工夫をしましょう。

③ どのように学ぶのか

学習の流れを提示(視覚化)しましょう。(板書、ICTの活用)
モデルの提示(イメージ化)をしましょう。(板書、ICTの活用)



④ 導入の工夫

前時の振り返りを活用しましょう。(ICTの活用)
わかりやすく具体的な文言で記述しましょう。(板書に明記)

本時の目標を明確に！

本時の目標



めあて

教師の
見通し

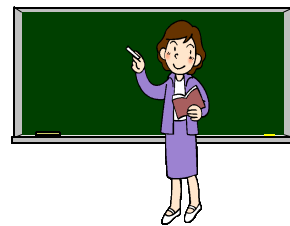
児童生徒の
見通し

授業が終わったときの児童生徒の姿をイメージしましょう。
(教師の視点)

導入の中で児童生徒から引き出したり、解決への必要感をもたせたりする工夫をしましょう。(児童生徒の視点へ)



ポイント2…【振り返り】 自己評価・「見通し」と対に



① 自己評価

わかったことを児童生徒自身の言葉で記述させます。

「よくわからなかったこと」や「もっと調べたいこと」なども書かせましょう。
記述内容を高めるためには、教師からの肯定的評価とアドバイスが大切です。

② 「見通し」と対に

「見通し」と「振り返り」がつながるように、振り返る視点を児童生徒に示しましょう。(めあてにあったまとめ)

振り返りの時間を確保しましょう。



③ 板書・ノート工夫

めあてや思考の過程等が見える板書の工夫をしましょう。

家庭学習でも「振り返り」ができるノート指導をしましょう。(黒板と連動)

④ 内容を吟味し、指導改善に

児童生徒の「振り返り」を吟味することで、教師自身の指導を「振り返り」、次時の指導に生かします。

児童生徒も教師も次の「見通し」につなげることが大切です。



「時間がなくなって十分な振り返りができなかった」という経験はありませんか。児童生徒が主体的に学ぶ授業づくりにおいて、振り返りは重要な学習活動です。めあてを踏まえた振り返りを位置付けることとあわせて、その時間をしっかり確保することにもこだわることが必要です！

【目標(めあて)】にあった【振り返り】と、学習内容の確実な定着を！

本時の
振り返り

児童生徒の
振り返り

教師の
振り返り

めあてに立ち返り、「本時で学んだこと」「大切だと思ったこと」などを児童生徒の言葉で記述させる。

児童生徒の評価とともに自分の評価を PDCA で次時へつなぐ。

「授業のはじめにめあてを提示する」「授業の最後に振り返りの時間を設定する」といった教師の計画を、学習者である児童生徒が主体的に行えるように工夫しましょう。そして、多面的な振り返りができるように、学習者個人での振り返りと、教室全体での振り返りの両方ができるように時間の確保をしましょう。

3-1

学級・学習集団づくりについて

ポイント1… ルールの定着 ポイント2… リレーションづくり ポイント3… 個と集団の視点

「学級・学習集団づくり」は、授業づくりの基盤です。児童生徒一人一人を育てることが、互いに学び合う学級・学習集団づくりにつながります。自主性・自律性が育つ学級・学習集団をめざし、発達段階に合わせた意図的な指導を継続的に行うことが必要です。



ポイント1… ルールの定着

- ① ルールとその意義を確認する。
- ② ルールを守れた場合は承認する。
- ③ 逸脱行動には毅然と対応する。

児童生徒が安心して過ごすことができるための「ルールづくり」、一人一人の違いを認め支え合える「リレーションづくり」の確立が大切です。

ルールは小さなところからほころんできます。小さなことでも確実にやるという教師の姿勢を示すことが大切です。教師が指導をしている姿から児童生徒も学んでいきます。



ポイント2… リレーションづくり

① 教師の働きかけ

児童生徒のよさを多面的にとらえ、日頃のがんばりや発言をしっかりと受け止めるとともに、発言の少ない児童生徒の意見を取りあげたり、間違った答えも大事にしたりする。

② 場の工夫

自分の考えをペアやグループで発表できる活動を取り入れるとともに、児童生徒がお互いに認め合える場を設定する。

③ エクササイズを活用

ピア・サポートや構成的グループエンカウンターなどを取り入れることによって、意図的・継続的なリレーションづくりに努める。

日々の授業でのかかわりを少し意識することによって、リレーションづくりができます。

ポイント3…個と集団の視点



① 個への指導・支援

児童生徒の姿を肯定的に捉え、一人一人を理解する。
児童生徒の苦手な部分を補う視点で具体的な支援策を考える。
「ほめる」「認める」機会をつくる。

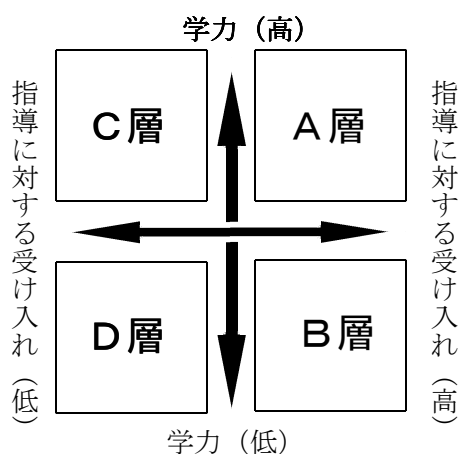
② 集団への指導・支援

すべての児童生徒を大切にする学級づくり、すべての児童生徒にわかりやすい授業づくりに努める。(ルール の 定着 と リレーションづくり)

個への指導・支援を行うに当たっては、学級担任が対応できること、できないことを確認し、学級担任だけで対応が難しい場合は、学校全体で対応を考えていくことが大切です。

よりよい学級集団づくり

学級集団づくりでは、児童生徒から信頼を得ることが大切になってきます。次の図は、児童生徒の層を、学力と指導の関係を軸に分けたものです。



- A層・・・学力は高く、教師の指導に対する受け入れも高い。
- B層・・・学力は高くないが、教師の指導に対する受け入れは高い。
- C層・・・学力は高いが、教師の指導に対する受け入れは低い。
- D層・・・学力は高くなく、教師の指導に対する受け入れも低い。

私たちは、どうしても支援が必要な児童生徒に目が向いてしまい、その個別対応に追われてしまいがちです。しかし、どの層にもまじめに取り組んでいる児童生徒がたくさんいます。すべての児童生徒の学習意欲を喚起し、発言やがんばりをしっかりと認め、大切にすることが、学級・学習集団づくりには大切になってきます。

- ◎ 一人一人の児童生徒を育てることが、互いに学び合う学級・学習集団づくりにつながり、教師の姿勢が児童生徒を導くことにつながります。
- ◎ そして、それぞれの学級経営方針を明確にし、組織的に関わる体制づくりも必要になってきます。

3-11

教材研究について

ポイント1…授業づくりは、教材研究から
ポイント2…教材研究のすすめ方
ポイント3…主体的に学ぶ教材



児童生徒の意欲を高め、鋭い追究ができるようにするには、よい教材を素早く見抜く目と、そのよさが生きるような授業をつくっていく力が要求されます。

ポイント 1…授業づくりは、教材研究から

授業づくりは、教材研究から始まります。私たちの周りには、原石(素材)がたくさんありますが、この原石を児童生徒にとってのダイヤモンドにするのは、教師の腕次第です。



- ① 教材の価値を見極める。⇒ 児童生徒にどんな力を身に付けさせることができるか。
- ② 児童生徒を理解する。⇒ 具体的な児童生徒の反応や変容を予想する。
- ③ 計画的な指導・効率的な指導をする。⇒ 実態に応じて内容を精選し、重点化する。

ポイント 2…教材研究のすすめ方

① 学習指導要領とその解説の熟読・理解

指導する目標・内容を正しく把握し、児童生徒にどんな力を付けるのか、そのために何を教材として取り上げればよいかなどを明らかにしましょう。



② 目指す児童生徒の姿

学習指導要領が示す目標・内容と目の前の児童生徒の実態を照らし合わせ、目標とする児童生徒の姿を想像しながら、教材の取り上げ方や学習活動の内容などを検討しましょう。

③ 1 授業時間から単元全体の教材研究へ

前時までの既習事項や次時以降にどう発展するのかなどを把握し、単元全体を見通した指導を工夫しながら、本時の教材研究をすることが大切です。

④ 系統性、発展性、関連性

この教材に関わる学習指導要領の目標・内容は、前の学年や同学年の他の内容とどのような関係にあるのか、さらに上の学年のどんな内容と結び付き、どのように発展していくのかなどを把握しておくことも大切です。

ポイント3…主体的に学ぶ教材

① 強い興味や関心をかき立てる教材

学習意欲を高めるには、児童生徒のこれまでの学習経験や生活体験、発達段階などを考慮して、児童生徒にとって興味や関心のある教材選びをすることが大切です。

② たくさんの疑問から、確かな課題へとつながる教材

児童生徒の疑問や問題意識をかき立てる要素が学習の対象に含まれていることが必要です。探究を進める中で新たな疑問が生まれ、探究が連続するような教材を工夫しましょう。

③ 具体的な学習活動と一体化する教材

学習活動が進めにくかったり、課題解決が困難な教材ではなく、課題解決のために児童生徒自身が見通しを持ち、多様な活動を工夫しやすい教材を取り上げることが必要です。

④ 児童生徒にとって身近な素材の教材化

その教材が児童生徒にとって、普段目にしたり体験したりしている身近なものであれば、疑問をもたせやすく、新たな疑問が生じたときなどに繰り返し見たり体験したりできるため、より自主的な探究活動へとつながっていきます。

⑤ ICT（タブレット端末等）を効果的に活用

効果的にICT（タブレット端末等）を活用することで、児童生徒の意欲をかき立て、主体的な学びへとつながっていくことが期待できます。



質の高い教材であっても、最初の出合いですと、児童生徒の探究意欲をかき立てることはできません。強い問題意識は、探究意欲の源です。教材をどのようなかたちで提示したり出合わせたりすれば、児童生徒の興味・関心を高め、強い問題意識をかき立てられるかを工夫することも重要です。

児童生徒と教材の出合いを工夫する視点

- ☆ これまでの学習経験などでは説明ができないようなこと
- ☆ これまでの学習内容と矛盾するようなこと
- ☆ 「きれい！」、「大きい！」などの驚きを誘うようなことなど



◎ 学習課題は、本時の学習のねらいを十分に達成できるものであり、児童生徒自身がつかむことのできるものでなくてはなりません。教師の想定した学習課題であっても、児童生徒の疑問をもとにして、児童生徒自身に自分たちの課題だという意識をもたせることが大切です。

◎ 個々の疑問から学習がスタートしても、個々の疑問を集約して学級全体の共通の課題として一人一人に把握させる工夫も必要です。

3-III

単元（題材）設定について

ポイント1…学習過程の構造化
ポイント2…児童生徒が言葉を駆使して表現する場面の設定
ポイント3…ワークシート等の工夫



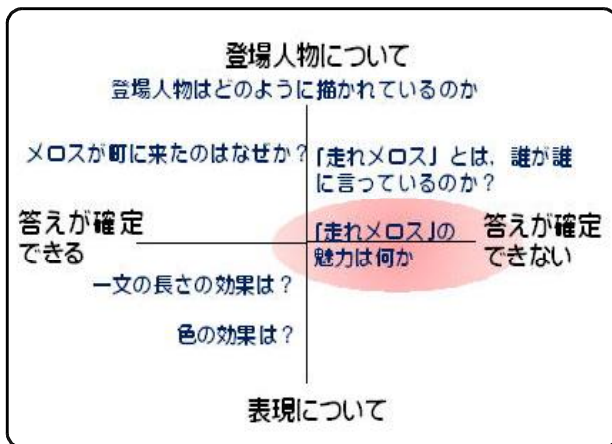
各教科の「見方・考え方」が、既習の知識・技能と結び付きながら生きて働くものとして習得されたり、児童生徒の思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界との関わりを意識させたりするように、単元（題材）設定を工夫しましょう。

ポイント 1 …学習過程の構造化

知識・技能の定着と学習内容の深い理解を図り、様々な場面で活用できる概念となるように、まずは学習課題を工夫しましょう。

- ① 複数の観点から追究することのできる課題であるか。
- ② 複数の情報に当たる必要のある課題であるか。

【中学校 国語「走れメロス」の場合】



例えば、指導計画を立てるときに、左のような座標を作って、問いを分類してみてもはどうでしょうか。

問いの中には、答えが確定できるもの（主に知識・技能に関するもの）と、答えが確定できないもの（主に思考・判断・表現に関するもの）があります。

答えが確定できない問いを単元（題材）全体で考えるべき学習課題として設定し、そのほかの問いを下位の問いとして分類して、学習過程を構成してみましょう。

ポイント 2 …児童生徒が言葉を駆使して表現する場面の設定

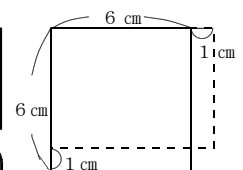
問題を解決した後、さらに発展させて新たな問いを発見させたり、条件の異同を確認しながら理由を考えたりする学習を設定しましょう。

【小学校 算数「図形」の場合】



1 辺の長さが 6 cm の正方形の縦の長さを 1 cm 短くし、横の長さを 1 cm 長くすると、面積はどうなるか。

できた長方形の面積は、もとの正方形の面積より 1 cm^2 小さくなりましたね。では、変える長さを 2 cm にすると、面積はどのように変わりますか。結果を予想してみましょう。



面積は 2 cm^2 小さくなるんじゃないかな。



どうしてそう考えるのかを問い返したり、実際に調べたりして、考える道筋や、そうなる理由について、説明できるようにしましょう。

正方形の縦の長さを 2 cm 短くし、横の長さを 2 cm 長くすると、面積はどう変わるか。

条件を変える

比較する

1辺が 7 cm のとき		1辺が 8 cm のとき
たて 横		たて 横
$7 \times 7 = 49$		$8 \times 8 = 64$
2 cm 短く 2 cm 長く		2 cm 短く 2 cm 長く
$5 \times 9 = 45$		$6 \times 10 = 60$
面積は 4 cm^2 小さくなる。		面積は 4 cm^2 小さくなる。

規則性を見つける

1 辺が 9 cm のときも、面積は 4 cm^2 小さくなるね。変えた長さは 2 cm なのに、面積が 4 cm^2 小さくなったわけは、...



ということは、辺の長さを 3 cm 変えたと、面積は 9 cm^2 小さくなるのかな。



児童生徒が理由を説明する必要性を実感できることが大切です。そのためには、条件を変えても同じ結果になることに気づいたり、予想と異なる結果になったときに疑問をもったり、答えを追究したりできるように、単元展開を工夫しましょう。

ポイント 3 …ワークシート等の工夫

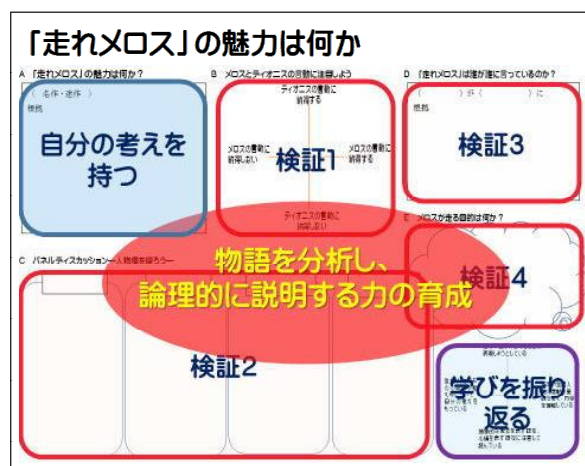
これまでの学習で身に付けた力の何を使えば、本単元（題材）の課題を解決できるのかを、児童生徒自身に考えさせ、判断させる工夫をしましょう。そのためには、児童生徒が自分の考えの形成を自覚しながら学習を進めることができるような工夫をすることが大切です。

これは、教師にとっても、児童生徒の思考がどのように進んでいるのか、どこで滞っているのかを把握して指導をすることにつながります。



たとえば、児童生徒の思考の流れが一览できるように、ワークシートを工夫してはどうでしょうか。こうすることで、単元（題材）の初めに持った考えが学習活動を通して練り上げられていく過程を可視化することができます。

ワークシートの中に身に付けさせたい力を示しておくと、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「何ができるようになるか」を意識した学習をさせることができます。



- ◎ 単元や題材を構想するときは、児童生徒が「何ができるようになるか」を明確にしながら、「何を学ぶか」という学習内容と、「どのように学ぶか」という学習過程を質的に高めていくことが重要です。
- ◎ 言語能力や情報活用能力等、学習の基盤として活用される資質・能力については教科等間の学習を関連付けながら育んでいくことも重要です。

3-Ⅳ

学習評価について

ポイント1…学習評価とは ポイント2…具体的な児童生徒の姿 ポイント3…学習評価の仕方

学習評価と聞くと、児童生徒一人一人の評定や成績を連想するかもしれませんが。それも学習評価の一つです。しかし、学習評価の在り方は、評定や成績をつけることだけではありません。

評価することが目的にならないように心がけ、教師の授業改善を含めた、指導と評価の一体化を図ることが大切です。



学習評価は教師の授業改善の重要な指標となります。学習評価を適切に行い、授業実践に真摯に向き合うことにより、授業力向上を図りましょう。

ポイント1…学習評価とは

① 学習評価の在り方

学習評価については、児童生徒一人一人の進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことが重要であるとともに、学習指導要領が示す資質・能力が確実に身に付いたかどうかの評価を行うことが重要です。そのため、「児童生徒にこういった資質・能力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにすることが求められます。

② 学習評価の実際 次の5つ（4W1H）を意識し明確にします。

「誰が」(Who)	評価するのか … 教師、児童生徒の自己評価や他者評価	他
「何を」(What)	評価するのか … 活動の様子、ノート記述	他
「いつ」(When)	評価するのか … 自力解決のとき、振り返りのとき	他
「どの場で」(Where)	評価するのか … 発話の場、グループ活動の場	他
「どのように」(How)	評価するのか … 取り組み方の観察、ノートの分析	他

ポイント2…具体的な児童生徒の姿

① 実現（体現）している具体的な児童生徒の姿の明確化

児童生徒の学びの姿がどのようになれば目標を達成した、または、迫ることができたのか、具体的な児童生徒の姿を明確にすることが重要です。抽象的ではなく、授業展開中に現れるであろう児童生徒の姿を具体的に考えておくことが求められます。

② 学習評価の妥当性、信頼性

学習評価については、妥当性、信頼性を高めるよう努めることが重要です。評価結果と評価しようとした目標との間に適切な関連があること（学習評価が学習指導の目標に対応するものとして行われていること）が求められます。

ポイント3…学習評価の仕方



① 単元を見通しての評価計画

1 単位時間ですべての観点について評価するのではなく、単元全体を通して、バランスよく評価することが大切です。また、評価のための負担が重くならないように配慮して作成することが重要です。

② 授業中における学習評価の生かし方

「授業中における学習評価の生かし方」とは、展開上での評価を適切に行い、その後の展開に反映させることを意味しています。つまり、学習活動の中で、設定した評価規準に基づいて、児童生徒の様子をよく見取りながら舵取りをすることです。そうすることにより、ある場面では、間をおいたり、もう一度前の場面に戻ったりするなどの柔軟な展開が生まれるでしょう。児童生徒を主体とした見取りや舵取りをしていけば、児童生徒の意識や思考の流れに沿った授業展開になり、児童生徒にとっての必然性や必要感と合致したものになります。その結果、高い学習効果を生み出すことにつながるのです。

③ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

学習評価の仕方で悩む観点の1つに「主体的に学習に取り組む態度」があります。単元を通しての毎時間の評価の平均や「よく発表している」「忘れ物がない」「まじめに取り組む」などのような、単元の学習内容に関係しない教師の感じ方や主観等、曖昧なもので評価してはいけません。「粘り強い取組を行おうとする側面」と「学習を調整しようとする側面」から単元の途中の意欲的な姿や、後半の学習意欲の高まりの評価を重視するなど、学習活動全体を通して捉えることが妥当だと言えるでしょう。

論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価を取り入れ、テストの結果にとどまらない多面的な評価を行っていく必要があります。また、総括的な評価のみならず、一人一人の学習過程における形成的な評価を行い、児童生徒の資質・能力がどのように伸びているかを日々の記録やポートフォリオなどを通じて把握できるようにしていくことも考えられます。

（「学習評価の在り方ハンドブック」国立教育政策研究所より作成）